



時勢新書 第一

特別
A5
6576
1



測を瀬乃夢哉史は里ん
 山ハ嵐北枝哉より作とや
 此里ん能潜乃作意哉を
 らく時とく世語此戲言哉
 毛そ多し連身此思あまそく
 ら守杉とて詩言乃金言哉取
 とや且小詞乃苑地更う世と
 心の水底おるより上ハ鴨川
 下名魚河乃流をく浦小川
 起て地くらが神唐迄の事哉
 なる事時小寛文乃始流と
 洛陽洞ドク能城乃南河前ハ幡
 宮乃東小取射る居と志と
 能潜此と号成る能杉後

今二



<96-142>

流すに白くふかき見けり
見見と推量^{ツシハカル}せし今年毛
いふを末乃末山我とて
たぐひもやう境たるけしむ
迄毛世道満くと祢愛此詭
或毛百韻或毛千句教自合
教自符遠誰もふひそと
志道毛れく所毛成と新毛
者毛不毛後乃事毛そ奇
其此作意とて中毛の毛あらと
十九廿此若人推毛量せし
子毛たる世道毛い者毛ひ事
花毛桑子たうら毛経居毛春
秋乃文暎哉余毛ら毛昔

日跡山小徑けり人毛かき
十六我毛六十毛秀毛自毛
毛傳毛も毛けり一毛色毛光
毛丸毛玉の結毛人毛く毛
空毛けり毛予毛毛乃毛時毛
毛縁毛小毛毛毛一毛人^トの交
お毛毛推量毛毛毛毛毛
やくと毛初一念毛毛毛横
毛の毛解毛阿毛毛毛
目加毛今毛毛毛悔の毛子
毛毛毛けり故毛十毛世
毛の毛毛毛毛毛毛毛
毛の毛毛毛毛毛毛毛

多らぬ事な鬼也標と守る
小冥るら便康乃毛の筆に
紅を流く屋事事と得と新
川乃一筋成なりとも然乃
浮皆陸小はさく乾くも志得
とん天恐しそ人の朝少
るうらすと秋冠取乃中近り
と海横意元亮のこもかひ
依神阿あさうま物をも城
け是於存命ハ又け風や後悔
るらんけ程阿が心成あえはる
於鄂也人との乃狂吟と念の
懐紙毛いとねりかきおまら
小にやうしをさる事なり

ちんをわぬとてま教自ハ小朋佳
州乃鈴小阿まはらぬ自を
東方翔があ小及ふ今けり
せいの白の波心潮花洛の
流く伊勢也能潜世小唱於
康川八十瀬の波小ぬ成る人
ちかき也食飯ま地くさるとは成
小よりそけち成能潜時勢転
堂号阿のれ同し流なり
ちびま又蓬乃下也心成取引
毛が那きくハ山崎の家鑑道
金毛生玉の体南と云し先
人おそらくハ作交平と控子
くらん水藍也たくり也事な

と書きしは流石小東の元
けしき昔人此へ多しかち多
富小伏名の舟中を阿之^{三三}極
近交江乃西北岸小東の流
所あり六十乃春なり

卯申今年之歸^{三三}より八苑の
本葉より一時雨也二時雨

天満小文北苑の禅門

聖護院御門主法岑入時

岑入者宮毛^{ワラダ}草鞋の籠屋也

芋^{三三}の先月城う野々々

大江岸近江東坊主

芳野おんえよと八を^{三三} 苑園

酒小苑袖沈む小う包い白紙

大坂中之鴻小橋山氏也

今某^{三三}より所と^{三三}なり

花尺小也阿る^{三三}狂白紙

鴻門主法岑入^{三三}時

貝志けみ^{三三}海陸の笠やお岑

難波寺北隱者老の姫^{三三}

塩乃目も^{三三}法^{三三}と老北春鹿

難波男梅法師出も^{三三}也

和助那山小林氏

門堂此^{三三}も人^{三三}家^{三三}の^{三三}小^{三三}家^{三三}の^{三三}子

唐よ菊小^{三三}一^{三三}句^{三三}祝^{三三}乃^{三三}浦^{三三}辺^{三三}也

江戸小橋中氏

吹笛や音^{三三}より^{三三}山^{三三}々^{三三}祇園社也

腰の骨^{三三}い^{三三}く^{三三}子^{三三}俺^{三三}と^{三三}何^{三三}も^{三三}櫻

東人乃申小邊公の御
金龍寺に花枝

花乃流地らと流清に龍頭
東坊乃厨

衣花野や富士城をむか袖
乃内

蘇小葉らと小蘇暖野を
随ふに花は不作りや道五葉

文顔乃自毛口惜に作三葉
三川氏並装

卯花や春に雲の陽紙
中井氏

行春を志しきら名や三之
忘れ小指城結し流るる

福井氏

二海や不常とまはれ時を
給道成るゝあはれを時を

三井氏

餅花やとあせしるにけさ
或品三吉野あき 乃ま

丁加福やかの舞加縁に文使
此木のまはれ人^{二井ハ川}を新治流波の

道筋成るゝあはれを時を
流成汲るゝ中乃心成知と名

凡能階に座席成執事如人
連歌乃大意成練磨せはるる

各の管の片をまじり自ら百らと
井此蛙哥成る乃口也とわらわら

狂句をうたふからぬ風情を
 志するにうたふる我未だ心もたふ
 ねむけ多く浮世の念もたふ
 禪チン認ニン哲人乃やうふて哲人
 らうと法をくかたをといふて狂
 本の中より雨をうてをこく
 うふ酒の鼓乃拍子と知れり
 小畑より事小阿らふ人小
 阿らはらふ人小口惜かたを
 其へもまを哥と詠諧たふ
 花を根小得るを古楽と云
 且信ふめ事た決く教場
 乃自を双紙の文章たまふ
 詩哥た心初たふフルキを温ヌグく

新しやと志重脚を同
 詩哥も物終りて詩歌事
 古来た制を重く成詩哥
 法をまのらた心も合て時
 其は成遠と志重氣とら加ふ
 阿ら對物ツイモツ成并あるまの
 脚車たも痛中三を思ふた
 知にかげをまぬる詩歌事
 之物ねるを八自ふらるる
 符合も合れく心は静り
 引ははらうら此自よるに連
 らくも意の思ふ比羽美た
 其理カサシツ膠カサシツ乃私語也此同
 座の宿世スウセ心中此佛を念

首小全る祿を敬ひ生死の控
羈旅乃其も是よりそ知る
のより種をらぬ押さへて哥林
良哉子事ふ重たはさか目此
子行哉始く自敷を削成出を
臨へも実がく先へも種絶と
もして塚磨か文柱をたさる
斐が二た云へも此氣乃同意
再體哉嫌ひ後射用射暗る
と除橙波化流此亦越小論
迫と并朝塩夕沙乃を遠小
指合と白と放増平懐乃朝
出せとと好まは細道具と取
こはとよりあふ文字解はり

たまる哉林帯て速云神有心
疎風流小をさうに妙な体
深哉とろめん心一机の神枕
いぬても能潜を思ひ阿多此
手此出ぬと毛並奇哉とらえ
万とく時とくもあゆる信を
花庭嚴より教ると云わ教主此
如東毛金色此像小光と放
備あは天復菩提も好花と
著事と喜新の經文釋文
儒史軍書乃朝唐詩和
奇調狂言古記小奇久し
世経事と種美事あまて
功月阿ら神志とらら便

詔諧の心出る是河原月津波
亀甲鱗形中色足跡尻浪
頭目巴の字成毛糸のあや
乃字致るまゝ一悟るはる世
語を越地小用ひて是後乃
福ひやとてははるをばや一あ
村邊成とてあしやとてあ
え兼人の心なる糸成出りみ
波小泣といひ詔諧乃と哥
毛指さ地くらふくら皮隣は
から此字の業麻乃中此
蓮生哉思ひ新らん新指乃
萩も吹くは昔葉も風子と
と阿や加里やと一と各毛

志らぬたははるもも世兼小
福をんねて庭を道に村の
今兼毛此日る事不新乃平
ふりそまらあらぬら指さる白
床一猿乃藝大乃能葉毛
乃子翎毛三光此針糸毛毛
山から此葉毛も能到る毛
はらぬ福成を新葉一と惟
毛結さるこ阿らるり今此
於又此哥此てあまえ此り
此毛を混令して家成んち
此毛か一と此指毛をさる
時あまらん乃鬼の角成あま
笑の刀此柄をさる一初ん

乃玉のこらふも竹馬に鞭
を赤橙深窓に女をこらふ
の策を押居り是をうた
流るるをいふるも一紙
配劑小車羊皮をうた
紫羅廻らば料理小車
調は望ん塩梅滑るる
割れ道乃力車を一乃
を赤く其行末を知小
相浦の沖に大舟も
を以てその方角城
柳形一柳一庭此白
怪をん三葉乃雲ある
陽小窓へる春山地く

若子迄息を此喜小
らぬて花乃都に余情
毛草此草葉結類を
乃袖を流らうら
五加や枸杞乃垣
子とあそぶ岩木
まどい小得らん
ちらえ書柳乃細眉
赤梅の花乃加
児様のをた
玉乃真神を惜
若此泣きぬ日
を同をよむ
時を毛十

心小くいふをぬぬ人やは家
暑き日焼く水とて此行
此も志らぬる月のを時
移りてはさく酔は舞の
木葉を散してさき一はふをら
めく後難が下を思ふを
荷ふそ有びるをみるは
さ物小拾ひふところ紙り
色も秋を思ふと見ん人乃
るとかや眠るをさし城の精
たくて度中え麻手小被るは
蓮も雲からさく壘の松志の
やういふ嵐はさくぬ高き
詠を切つたにいとて甲斐を

友達かこころの節小を
唇をらう餘は蝶足乃脛
みすゆふ白筆の小鳴端
了福と味海城鞆炭乃
燗小紅と吹く権と此書は
毛今更小結くふあ
才一心付成いへる此道長
久乃瑞おろす廣く志くゆ
般了瑞くさる身をたえ
かちの筆は林をる目も松と
悦成をふくさく思ふを
南蠻迄も新物と遊諧の
作意をわゆる頃一國乃既
地小あつたを合乃白と此

あはれ鳴呼へくも家
りや

あはれもあはれ恨深きし
花乃見活れあせぬや

大羽のまきおのあせぬ
別乃長刀次人及中

あはれあはれあはれあはれ
口惜や音あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

執事氣も物の上のたのび
いける持事昨日と書つ
いふもある美のあこめを
中三詩号

尺屋きんさの肉小書報
朝朗年本と書つた
今日報日此秋風く
條の先柳の氣力後を
五月雨の流ら星小たら
物のまじりも尺屋梅のよ
大夫人小馴あめを
分はしつたのそを

中四對句

女帯を夏ハ鷲子ふはも
秋の蹄かき此錫あも
虫た鏡短支油老も一
鴨乃昔道ふ又鶴の
いりうく鮑の貝片
急ふも辛螺乃から
中五出并葉

行
あま着れかく
地獄も月乃境を
神まもふ
筒乃名座一神

浪乃喜おふあふに友
塔乃ういり海への雲を
す天取成

ある致ゆる一葉も
花を根小得都の葉兵衛
野山もとやうに結の三束田
水田草も今ふと目
おこふあがも好む人心
書はくしうう白蛇乃解
さらそ此の歌城幾子入玉
胡桃小阿けりながらあし
松樹を一皮と成はる
白木柱の花はあふを世
まぬとあふ松とるうと

おあふいりううあふあふ
浪乃人行あふうあふ
おこふあがも好む人心
書はくしうう白蛇乃解
さらそ此の歌城幾子入玉
胡桃小阿けりながらあし
松樹を一皮と成はる
白木柱の花はあふを世
まぬとあふ松とるうと

人の心を池に比して深き
乃其心から起つて一何れも
やうに乃其心から起つて
其心を身にしるすも其心の
まはれぬてあふぬ其心は
深き其音をばつてまき
其心は水にあらうか
つと秋の心なるま枯の利
其心はつて其心はつて
其心はつて其心はつて
其心はつて其心はつて
其心はつて其心はつて
乃其心はつて其心はつて

ゆ乃其心はつて其心はつて
其心のまはれぬてあふぬ
其心はつて其心はつて
其心はつて其心はつて
其心はつて其心はつて
其心はつて其心はつて
其心はつて其心はつて
其心はつて其心はつて
其心はつて其心はつて
其心はつて其心はつて
其心はつて其心はつて
其心はつて其心はつて
其心はつて其心はつて
其心はつて其心はつて
其心はつて其心はつて
其心はつて其心はつて

法皇御母三十五夜此は
めで十三夜此は龍と云ふや見
ける月此龍の一夜乃友於
橋小乃るやまこ名を龍成
橋と云ふ音信と云ふ事なり
乃るやまこ小春城若菜時雨
を龍と云ふ龍の音を龍と云
る事なり有らんやまこ龍雲たま
に龍雲見れば此は遠い事と云
法深書を横川比良乃る龍
近き大魚小跡乃る雲無坂
比叡坂一系寺修学寺志願
八塔乃る長谷花雲畑枝芥出
并出たれば白妙此都の事なり

いよふまゝなり一月西小かち
を東を此を龍と云ふ声なり
魚小龍一魚を龍と云ふ道
乃上の句下乃る龍と云ふ道の
志願ならん若小の角小の事
一と云ふ八子代オホナカの龍小龍踏
を龍と云ふ神佛此を龍と云ふ
又上の句小金を龍と云ふ道代
龍小龍成と云ふ事なり
法深納りて民乃龍川小
を龍と云ふ龍と云ふ事なり
新嘗會を五年此書今を龍と云
と三指の白妙と云ふ事なり
お小と云ふ事なり

時勢雜考第一目錄

春部

元日一	水祝二	若菜三
苔	梅	餅
芳野餅配	温盤	猫書忌
白魚	椀翅	鱈鳥
雉子	帰厚	乾能
菊	柳	三月三日
桃	海棠	花
櫻	躑躅	藤
菜摘	雜春	

時世雜考 古事之類

元日

石井如自

洗ハトキニ皇親此松色大節

廣野金貞

世海老也松小之流石門の松

風虎

海老加子也本流ハハノ之老乃春

天路弘之

代々也松小之々々大加比里

魚田貞伸

我門小地也皇親也松色大節

中井高隆

東る也也あぬハの松也京出

堀江安辨 産

米多也今自取日々と松物子

音の成り人々を重松拍子
園蹄朋之

西村良庵

昨日あつた年い無服の之を初
時を今春ふたり拍や調初

金沢家貞

乙子あつて誰りよへて之を初

中村孝忠

家声もよみ出にあり調之め

廣野金貞

調之先を今つたあつて誰彼か

三山もの人乃あつて此花見か

佐伯惟次

合毛成也く毛級名乃試筆哉

森准忠

吾心あつて古きもの試筆哉

石井如自

試筆よも鈴也ゆはすすも石

李以宗祇

中初やすもゆるも紙之を

三野忠孝

中初此詩や唐乃より蹄紙

筆始今日あつかくも自心書

水野林元

心あつて何處に書き筆始

林守甫

今朝一白あつて筆始

原田貞伸

春もよりかくあつて筆始

中井宗隆

筆もよりあつて筆始

山口徳久 棚

海松之やうらみわらふ

元禄三年

心あふむらさき

那山恒行

出た本の海つる論や

那山恒行

鎖論やあひまの後の

泉亭子

我花鏡さすも

日月不更

老小を人

梅山深友

春や昔たのてあ

鞆貫元辰

易代と龜之知らん

鉦羅英

吉例や

林亭

老乃

我一

福井

春や

又

濱田

我

志

向

其

一

水

都

よ

龍悲方

春也也て人女也草も花也

石井如自 年

酌海や軌といふも家三乃也

福井守昌

敷の子も子母もといふも子母也

横山木幸子

八千世中へある時のあらんかしの

濱田春之 餅

蓬萊此山も今日さうふ林乃

小谷三郎 書

蓬萊小の海も東のくんし 書

西村良唐

正月を老う海くや礼あといふ

物の礼も是よりといふも玉

近江徳信

年玉や志も志らぬも扇籠

中井宗隆

年玉ハ志あて礼はる阿ふ也

水祝 風虎

加ふと加加也や舞此水祝

いふといふ一ヶ月加此水祝

西村良唐

花舞只舞も加けといふも

幸田守昌

いふも心むといふも知らん水阿も世

真方深之

流くも妹背みたりやもあも世

畑山勝之

昔たは加り里初よりいふも

涉魯政成

水祝く世といふも袖海くも

那山安長

逢瀬志れ瀬と成げりぬ

尾和布

多きをわ朝いせらぬ女當茶

石井如自

逢ふてかく傍くけと茶當茶

日野好元

此もあつふ相茶あもる去茶

一志文章

よめり茶や今日我家の汁乃妻

あひ合立勢

是も撫人よとて鬼路老

塩川如白

眩ゆき入ある磯乃防風

中井正成

浦浪や花小成ゆく梅花里

梅

一志文章

笠の内毛白ひそ知や何乃花

竹下直孝

星下月小空りや心ぬ此恋

藤月直孝

産産月小梅乃あふ玉

伴久丸

梅う喜ふ小袖毛阿や

小盗人

空に飛ぶ亭主柱や梅花

無摩之住

朝つ毛花の多おこせ世を梅

小沢元下

解をあらぬ何日迄

芳野海配 須田東行

あは山小崩るる雪う餅をり

温祭

日野好元

朽木を煮て和らげ温祭縁

那山安長

又うづもを煮たの酒や福を乞ふ

猫煮意

日野好元

あまのこほらや遊る猫乃煮

はるまじや鯉を煮て猫の声

上田又村

是を煮て煮たは子結維猫

白魚

泉命子一三

白魚成玉小のぬり目しり

梅鯛

松尾弘次

はるまじのぬり目しり酢の料理

鶯

西村良彦

鯛を煮て我小琴するうぢ色

雛子

安清未了

追ぬまをばらぬ別や子持雛

帰原

西村良彦

朝霧小あまを帰天味原

竹下重孝

雪氷やばらぬ阿豆しりぬ加

菊之能

作者不知

鞠掛や七日乃りり神の能

菊花

日野好元

妹の垣根やを地小も海草書

柳

泉命一三

道のへ乃葉をハ物ハ柳陰

三月三日

大坂定長

五心袖を搦平にぬりては

多文揚物

指さすふ今日そ我子毛をぬ

やくとを煮を煮るん草の毛を

廣野金貞

有草の毛もあわゆる給櫃
是は秋小あんと初更の毛もあ

地すもま一餅や楊枝の山花
桃 風虎

酒房や花をおくある桃乃宴
雲村あ見

梅花甚まはゆのやまの酒
海棠 本堂の山花

瑞雲の痛まりるる花乃登
花 本浦主茂

花さるん分全のや米田の老
山花の故

いぢゆる人よ初瀬乃花乃米田
小谷立勢

う川かたと人や初瀬乃花乃米田

花乃米田のやまの酒
山花の故

葉の残もあはれと云花乃米田
山花の故

ふまはれ今白くも花乃米田
山花の故

咲花乃下にかくる山花乃米田
上川連元

思出の山花乃米田
中井宗隆

花乃米田の山花乃米田
山花の故

花乃米田の山花乃米田
山花の故

花乃米田の山花乃米田
山花の故

多小疎石走るなり花の凝

小田素所貞

老る目も花を昔乃かき斗

加い後の花のかえりやぬりあ

奥田元吉

并由小なるもはちあへをいふ

秋葉是等

吾言罷を何とつめやり花を酒

花小あふぬきうやいつも鞠の

波辺一直

花よりあふぬきうやいつも床乃上

申宮親宣

花小あふぬき居やいつも亭に

鱈燿笑

とあて我^がを旅に居らん花乃宿

高橋政永

花見小中若敷を喜み西東

志賀修安

花見小袖田舎を春の綿雪

深堀如閑

花の色香残にぬきぬき

駒井貞盛

笑花小思ひ作るい詩人の子

原田貞伸

花小白毛やそ出ぬや芳路山

永田明行

いそえふいとこいそえふと花の

林守貞

花乃陰たむき向やむきまくら

神氏文貞

花小光い流くは阿比と娘園寺

康王言

花の下にて暮死をよむ五生念解

森川正家

熟乃困や志からみかけの在り流

松尾弘次

心もたぬぬきあふるや花乃雨

安崎直陳

死くも春をよむ望る橋本武

新橋久実

五とよく今もあふる望る花乃雨

橋

西村良彦

ぬきあふる人や望る花乃雨

本橋色氏

橋本今日も望る花乃雨

忍田貞伸

橋本今日も望る花乃雨

山田二休

酒乃暮をよむ望る花乃雨

本村正恒

よ乃甲にそく橋本行乃角

福本一英

春や命老と死をよむ望る花乃雨

加古清永

是れ女先の思ひをよむ望る花乃雨

本橋色氏

望る花乃雨をよむ望る花乃雨

本橋色氏

望る花乃雨をよむ望る花乃雨

本橋色氏

望る花乃雨をよむ望る花乃雨

望る花乃雨をよむ望る花乃雨

風虎

望る花乃雨をよむ望る花乃雨

林字部

上乃ぬ戸戸西乃移小如と地々不

挂田保行

梅々重茂徒移もく平の家々より

鄭彌

水蹄林元

岩我々之格也格し此也元海

藤

家塚貞次

白乃毛すけぬ書乃け書也

宝光院似水

松乃及也只書乃日小波り色也

茶摘

康六言

葉也摘や今いり何之後昔

雜春

池山言故

灸日人去年此古跡乃古蓮

日野好元

蛤毛丸木格とや書乃海

夏部

夏元一

牡丹二

卯苑三

新樹

若相

若人草

葵

荆棘

青麦

時鳥

菅蒲刀

帷子

五月雨

挂田

早松草

楊梅

書山椒

檉

花松榴

薪茶

螢

蚊

蟬

鮎

沖脰

鮎

河狩

茄子

瓜

檉麻

蓮

祇雲云

寫古詣

湯煮汗

土用平

白雨

扇

暑氣

御積

晚夏

夏部

更衣

中村一安

阿古由也 袖乃才入毛ぬたて也

石井如自

綿ぬたを毛と此方ゆゑ給哉

牡丹

日野好元

いしり猫更之植し牡丹之

卯花

石井如自

雪乃才小友ハ其ゆけり也

新樹

林一貞

策の柔れ太しハ鞘也之小立

若楓

色取契也

志未の小乃やそれ九乃楓

夏人草

高山玄心

堪よハ小乃也阿人ヤ夏人草

葵

西村良庵

庚之ぬしハ葵之草此花ハ

荆棘

細山勝之

手也花伐折るぬしハ之ハ

青麦

日野好元

青麦毛之ぬしハ末名出カ

郭公

高井貞盛

親之んハまゝハ物名也

中村每度

うかゆけり人哉初者此時也

橋本安長

結青ハ子け毛の毛敷と子親

伴人似

新やらそきふるや時也

貞方保之

中やハ小ハ之の毛焼也郭公

柴垣ト松

鳴やらそ山落たりは時多

林亨甫

時多木の葉は月や射乃の

荒木甲武在

月平好多しや後とくま

泉亭一二

叔吉阿比月うまのころやと

冷泉友知

子規あり此の月や玉のや

多又忍溪

哥や詩我賦ふをすれん時多

菖蒲刀 畑山猪之

菖蒲刀はやあしりし行のへら

帷子 申井亭隆

綿入をい流きよふけん麻地み

清水雅克

近江てふ名を言ふや時多し

中井正成

あつたし一差い流きの草花

三月雨 思得亭休

壇やた日髪ゆるる乃又月也

桂田 日野好元

よんあまのるの下こそ田くし哥

原田貞伸

まこやいふそ和の鑑を田の

早稲草 石井如自

朝日記ふつるしや子坐草

堂江宗候

秋の我又さうをたあつた草

楊梅 園野朋之

山もははぬまをせらいつて

善山椒 橋本富久

朝倉や白ひを名乃るまじい

標

康之吉

重乃よふ乃る雨まじの標

花拓福

水野林元

河のまじりなるまじらんせま

新茶

貞方保之

新茶清く張や昔の書乃る

標山由孝

香まじりひ茶まじ標乃る

堂

石井如自

晴る度乃る海人や堂

袖に毛ひくや物まじ飛乃る

林原修安

堂乃る阿乃る海乃る紙乃る

藤原和親

子まじりや堂乃る海乃る月乃る

蝦

那山恒行

東るとのふ乃る海乃る蝦乃る

園野金行

まじり乃るまじり乃る声乃る

高畑市隠

蝦とまじり飛進乃るんまじり

伊賀之住

度乃る夏乃る合乃る成乃る

池山三郎

書乃るめ乃る垣乃るや乃る

蟬

水野林元

まじり乃る雨乃るた乃るまじり

貞方保之

標乃る鳴乃るまじり乃る

中井正成

浮級乃る沙乃るまじり乃る

鮎

中嶋親直

在るも也 叢と成てあけら鮎

西村三層

藝も多野をすりて一層鮎

那山末悦

藝よ於思ひ居く所此鮎乃鮎

沖船

風虎

藝之能も也 緑成る沖船

鮎

日野好元

流とるも也 けりて鮎小藝

高知市隠

鮎入る道とけりて小藝繩外

河指

長月首負

川指や鮎小柄も夏もあつ毛

茄子

松川以東

むらばたの一口ゆりや初茄子

凡

行下重孝

地事り止たきかきりて番成凡

日野好元

よ家の地事り止人傳し凡畠

交時直利

今八只思え給ふん多鮎乃凡

松浦廣寧

いせとらまきそまきまき凡

中井正成

包丁も平法入涼もあつ凡

橋山保春

あかつらいつなる節成満く凡

石井如自

ぬまも入り思ふもつて海く凡

親氏善然

とてんもつて産るも成凡凡

上座如何

唯此也（？） （？）

榎麻 奥田永守

直子（？） （？）

蓮 神友親殿

とす（？） （？）

祇園寺 橋本富吉

神也（？） （？）

表野保徳

神也（？） （？）

空浦守長

祇園寺（？） （？）

森口（？）

体（？） （？）

富士詣 日野好元

此月也（？） （？）

福井重昌

新（？） （？）

湯殿行 風虎

志乃（？） （？）

日野好元

水（？） （？）

赤用干 赤（？）

表（？） （？）

白雨 池（？）

夕（？） （？）

貞（？）

十市（？） （？）

扇 平信久

扇（？） （？）

中坂守長

年（？） （？）

金三

石井如自

五子之庭片元海也如字

竹屋莫时

奈以因庭以手也一二面

暑氣

遊春田不及

升户小庭物也也水葉

梳山保友 碗

白玉此百子也汗也地也

淨穢

查以多也

意也也也也也也也也

林字也

娥也也也也也也也

晚夏

海邊一畫

明日也秋序袖涼也夏衣

煖部

七夕

莖實

甄管實

秋茄子

秋小角豆

禿糸

花火

踊

丸撲

秋

若菫菫

生綿

膏

脊入

江鮭

紅藥錦

色鳥

鵲

鳴吹

秋膏

康

敷賀市

約近

月

掃衣

草

菓

梅嶺

菊

色葉

秋田

新海

雞好

炼部

七夕

廣野金貞

秋乃夜也子語哉一夜也二星

駒井貞威

女史星人傳事して遠夜も子

小沢流下

雨乃夜也つたうしと云く男

風虎

よる此雨小多かきうく男

日野好元

泣波雨乃只と云く也星此中

深香政茂

雨小く袖ハ衣流らぬ男七夕

草二更

康吉言

ぬくも実也流らぬ女此雨草乃

亂筆草二更

泉亭一三

系

所ハ世何終ふかろくたきこ

秋茄子

中井一哉

流らぬも時ハ名もく秋茄子

幸山若一

風鳴る心也舒秋も子

秋小角豆

竹屋英時

秋乃くも一針之堪此ハ

玉糸

真方保之

あまのいふ草葉物ハ玉糸

雨夜笑穂

尺之也秋の高と云く魂は此中

石井如自

玉糸所ハ余所く小何れ也

花火

風虎

終夜ハ之哉あまのいふ花火也

椿中多虫

新舟の跡見ゆる道花火の式

誦

源奈田不及

場なりや袖を穿てて一を記

永野林元

踊身も星を記してやいふや

舟屋如藤

一やや世にやうな事なすやう

幸田守昌

見せし世に揚せしある事なす

畑山勝之

多し袖や被ゆさうし何連踊

日野好元

踊指子取んばい何と玉輝

中井宗隆

分りておみもよらしと踊

お撲

永崎一見

多し世にやうな事なすやう

二本松秀房

新もあつて誰か見ん破お撲

潘香英総

手とりておみもよらしと踊

白岩人但お撲

はたしあつて誰か見ん破お撲

永崎一見

張子の帯に汗りておみもよらし

井倉如雲

能ひあつて井子下帯やとつてお撲

畑山勝之

多し世にやうな事なすやう

江東幸昌

多し世にやうな事なすやう

お撲

永崎一見

高きうらむらぬ花やあふれ

若草花 木下草花

あつたふくけやあつたふくけ

木下草花

あつたふくけやあつたふくけ

風虎

あつたふくけやあつたふくけ

貞方保之

あつたふくけやあつたふくけ

雲山秋也

あつたふくけやあつたふくけ

あつたふくけやあつたふくけ

あつたふくけやあつたふくけ

雲 雲山秋也

あつたふくけやあつたふくけ

雲 雲山秋也

又上もたつたふくけやあつたふくけ

あつたふくけやあつたふくけ

あつたふくけやあつたふくけ

あつたふくけやあつたふくけ

あつたふくけやあつたふくけ

あつたふくけやあつたふくけ

あつたふくけやあつたふくけ

あつたふくけやあつたふくけ

あつたふくけやあつたふくけ

あつたふくけやあつたふくけ

あつたふくけやあつたふくけ

あつたふくけやあつたふくけ

あつたふくけやあつたふくけ

あつたふくけやあつたふくけ

あつたふくけやあつたふくけ

あつたふくけやあつたふくけ

石井如自

うたはすもたや彼僧正乃歌云

鳴吹

岩城不白

秋風小吹合とあると鳴の言似

今西心感

吹からに秋の本心や鳴乃事ぬ

秋意多

風虎

行と奪哉うそ湯柳の歌に

鹿

社名新感

よそそやけ秋の何るは鹿の笛

社跡忠知

五葉もやこころハ正統田川

敦賀市 金沢八可

弱笛く手や打構おはるり市

弱笛

息方深之

秋は唐もとるん忘る子弱笛

月

菊田重好

遠くをたまたまの思ふは雲の

森准也

月影や我小部とある人の事

平戸英作

對面ゆくるも月小影法師

水谷吉明

月や百らぬ桂や昔おとこふ事

白鳥子一三

酒は遠法を此頁の月尺身

秋葉是也

あはれおとこ越戸とあるは親の

秋山言行

申ぬく出月く毛三笠山

風虎

水乃面山照月影の珊瑚子

石井如自

物の名を不ふよりぬ月見

林亭南

三五夜や月見外と書はる

志賀後安

名月や終る様乃奇ある

橋亮 西村三正

月をいふ今川石や在の里

廣野金貞

さ道ふ家かしくやう流きあ

葺 橋本富忠

葺物や松茂あつとく秋乃真

木村未及

人や又草花松とよむ

菓 福山若一

本や身や白あつと乃汁の柚

乙井如自

くよりの毛香こそと氣とお

湯香政茂

くおぬまの今とよ赤く松

日野好元

駿河や多ふり一目空

梅嫌 尾虎

尺原もは花よ紅葉と梅

菊 女堂言

ぬき強もや唐留とく咲菊乃

濡海乃後きるとくら葉の

多文獨始

たふあふとやとそ更色や

平信久

あふと一葉とるも葉ふ

朝江村寛

枝くや艶乃らふもかしめ花

水野林元

玉毛しつとを栗やみ草

廣野金貞

醒醒や起波とせむる菊乃海

舟中長久

塗くふと望地や菊のす時

之三葉

駒井貞國

月枝枝をるいはや片かんを

秋田

水野林元

立別編乃辰もや火介此雲

之取雖云

山田守僧都の身こそ佛美

新海

日野好元

舟き多し江川此宿や新海

西山西翁

古酒

新編代移るやわうそ此巖橋

雜游

過心樓

冷麦此水小秋のそかよみ盡

権山深友

そと切や花をた置も世錦

日野好元

我々切れよまゝいそ散花らふ

朝比奈平傳

月乃若なくはゆふ此信流る

之野出守

酒も子銚と出るの奥此を

石井如自

唐風毛西こそ秋此走り船

本江宗派

入舟成花や五葉の阿比婆

冬部

時雨	瓜子	湯花
水仙花	霜	頭巾
縁綿	紙子	衾
袴豆	新扣	炸
生肌	鯛	鱈
子烏	鴨	追鳥
音	雪	雲酒
海	雪紅粉	燻掃
餅花	紫葉	

冬部

喜々々々今と海鳥と山時雨
 坂田可随
 山眉のまゝ入松を時雨
 瓜子 西山鳥
 白くしんよりのしらやま子
 湯花 山井守隼 餅
 月枝を銀平毛見よ湯花
 西山鳥
 月や何らぬま三月やかつり
 水仙花 冬紅葉紙
 冬草花枯きととんぬ水仙花
 栗 餅
 栗江へんまき再障の七月六日
 白鳥子一三

冬ハ夏ハ小せめらるる 袴也 袴

額巾 不破一具 袴

重た日やいふたまははあひ及

袴中 富貴 中

朝多ハ夏ハ冬ハ中あはく 袴

幸田幸昌

朝多ハ夏ハ冬ハ中あはく 袴

井上忠時

綿帽子も玉満もせらるる 袴

繙綿 西村三彦

昨日より今日とくらへる 袴

紙子 井上忠時

若貴中子や細谷川のあふはし

被 越前秀雄

濡心水からぬ中やえり 袴

袴 日野好元

袴も冬は流るる 袴

水野林元

袴も冬は流るる 袴

袴 袴 袴

飄然も夏は流るる 袴

廣瀬久治

袴も冬は流るる 袴

袴 袴

袴も冬は流るる 袴

原田貞伸

袴も冬は流るる 袴

林三郎

袴も冬は流るる 袴

西村三彦

又やらんかこの五徳乃 袴

廣三郎

いふに此の地は 昔は金
海邊なるものなりと云ふなり

生海龍 佐倉の地

風流の地なる所なりと云ふなり

下河邊の地

嵐たふしと云ふ地なる所なり

鯽 出雲の地

尾さく地なる所なりと云ふなり

鱈 尾鹿 鯽

雲の地なる所なりと云ふなり

橋本なる地

尾さく地なる所なりと云ふなり

尾 山川なる地

水たふしと云ふ地なる所なり

鴨 尾村なる地

尾鴨の地なる所なりと云ふなり

暖の地 中井なる地

生て成るものなりと云ふなり

遠の地 高津なる地

遠の地なる所なりと云ふなり

雲 出雲なる地

雲の地なる所なりと云ふなり

尾田なる地

雲の地なる所なりと云ふなり

尾村なる地

本居なるものなりと云ふなり

尾井なる地

佐倉の地なる所なりと云ふなり

雲 尾

馬合の地なる所なりと云ふなり

尾子なる地

馬下地の地なる所なりと云ふなり

井上忠時

かゝる事極楽なりて今日此雪

深垣卜琴

富士の雪は行かぬと見え極楽外

豊村孝貞

あつてもそな申やぬ心入富士の

僧正春苑

我師世小ありて流ありや雪と綿

牧路三春

白土や須弥の入江此雪の音

大沢吉信

雪小田此白た枝え雪下白外

小倉不覚

曾白乃こもさくたより雪か

森幸正

雪のこも下氣毎小たくと流る

衣田一志

雪あらして枝乃柔白一香此灰

畑山勝久

茶の湯もあも人をも雪乃雪

深堀似閑

雪はこも成るも今と酒も惜多練

芳野偷東

雪とまきと痛酒とまけん雪あ

流

月と雪と雪や三川乃な鏡

中井三隆

雪小申小強も幾日も雪あ

雪之紅粉

此もあつた雪もあつた雪もあつた

月虎

今四小句の雪もあつた雪もあつた

雪之紅粉

山井きえ

秋乃より福る計や重た紅

蝶帯

李の秋や

大くから小気る思ふ秋の蝶

秋の蝶

我唐やふくた居已蝶えらん

蝶の蝶

すくたの重た重たや年三

吉田元夫

葉の重た重た重た重た重た

餅花

小沢元下

餅花ありとや家小なく風

相持了春

重た重た重た重た重た重た

貞言海

地ら重た重た重た重た重た

那山安長

餅花や重た重た重た重た

餅花

重た重た重た重た重た重た

節分

重た重た

重た重た重た重た重た重た

重た重た

重た重た重た重た重た重た

風虎

乃三

重た重た重た重た重た重た

年内立春

重た重た

春立と重た重た重た重た重た

重た重た

重た重た

重た重た重た重た重た重た

重た

時世粧
哥詩文

元日
春
水祝二
方引三

梅
江餅
飯餠
梅籠
貓書志

朝齋
雛子
歸厚
蝶

燕
柳
草餅
莢
蝶

花
春郭公
楊桃

時鳥
夏
牡丹
芍藥

一儿
石竹
石菖
麥秋

新茶
藻荇
標

竹子
菖蒲
競馬
蚊

螢
嘉祥
中拂
祇軍氣

蓮
清水汲
雜夏
泉

初秋
七夕
揚灯籠

花火
踊
相撲

露
朝顏
瓜瓜

女而屯
榮
秋鉾

若草若
生綿吹
鶉

更
文鳥
月

菓 菊 紅菓
 煉田 冬 新海
 時雨 粟 神楽
 冬 炭 火爐
 頭巾 緑綿 暖冬
 鴨 軀
 髮玉 袴 五反
 雪 冬 冬 冬
 冬 冬 冬 冬
 冬 冬 冬 冬
 雜冬

春部 牙詩文

元日 竹下孝相

心をくたはるの雨も筆始

石井如月

眼を曲て其肉小く筆始

近之務

今朝一白雪我時雨も筆始

書初や雪とあつた櫛小有

井川之堅

筆の如き海乃筆ある硯也

月田輝貞

我小をいふ如く自由も筆始

北山高故

鳥子成十の筆針古書も

廣野金貞

三物も雪の花は南枝も

日野好元

蓬萊の山後山江乃春

梶山保友

蓬萊の山後山江乃春

本陣廣平

不^レ_レの山後山江乃春

本陣廣平

阿^レの山後山江乃春

泉寺一三

雜考^レの山後山江乃春

井上中尉

芋^レの山後山江乃春

井上中尉

姉^レ哉^{子二エヤ}の山後山江乃春

報江種寛

治^レの山後山江乃春

報江種寛

心志^レの山後山江乃春

申井宗隆

手^レの山後山江乃春

申井宗隆

年^レ玉^レの山後山江乃春

石井好貞

阿^レの山後山江乃春

石井好貞

名^レの山後山江乃春

一心文孝

顔^レの山後山江乃春

津島宗

元^レ日^レの山後山江乃春

谷口宗

春^レの山後山江乃春

此社や河原町月夜の

上田尺林

名もなき三つやと春の

之歸来也

是也又少子やと春の

田中幸道

鯛乃子も望みの母やと春の

小沢流下

社地其も望みの母やと春の

西村良庵

陽春の空く咲をや福寿草

福井重昌

君ややと社地其も望みの

月虎

名もなきや家とのいふ春

門口やおんさうる春の

八木定孝

門小立るとみく代や松

池田守直

村子門を出入りするや松

真方保久

い甘きひや荷給ふ足る松

北山三郎

高砂乃と社地其も望みの

林守直

門堂地声所そとるや松

原田貞伸

町立なる山や遠草此が松

西村良庵

社地其も望みの母やと春の

如

水祝 日野好元

如家事此亦る事小ころハハ祝

堀川如白

人の心風呂小段よけの祝

言引 水野林元

言引人子と書る日らハハ

梅 行下書相

梅乃と海と文庫や朝野

廣野全貞

鼻阿光則入や梅の如き

小谷立好

梅と云う風と射と 雲の如き

不台口まみ

五梅も遠小照をくまら梅山

中嶋新直

少や小藩よりと梅の如き

録蜻 柳系但重

と城村ととと録蜻や一とと

井上忠時

春や昔蜻乃入道明石と

鍾干 菊元順

昔の日小海と世鍾干海辺と

近江錦 貞子深之

眩ふくくつと子の有阿と射

柳鏡 花川田平

柳理小やとら先うとく梅と人

猫書無 花江宗派

大和意と人とと書る也猫乃書

井持友好

書多小八重ととと海男猫と

水野林元

書成とと川もと果て灰色猫

朝露

唐書

朝露小泣のく西白文物場

雉子

西山西翁

春北陽小河よ書んくき世色

響

森准和

是ハ後乃下照輝くくそ乃鳥

燕

寺田守昌

人乃家之まゝるくや燕乃巢

扇厚

佐田村安

扇丁いさくくく心邪くしをる

蝶

粟和

花ハ又如をく花をぬ胡蝶く

柳

風虎

雨巾や測乃底以流く玉柳

貞子保之

志るるくもぬくくくく柳陰

橋中申恒

木のくせやししふるく柳母

田中甚治

氣力まると雨を療治の柳母

一志又孝

石白や水まじり法里川柳

蕨

加川定信

手杖杖くくく柳や初蕨

莖

若思信元

花さくや乃山出く草壺草

雛花

沼山信成

花な事や飯くくくくあめ

草餅

一土又孝

今いそく忘ぬ草花をらぬら

枇

奥田方格

花さくく春得くくくく海

花疎 山之高故
雲脚危崖中 尤芳野此也 疎

花

野井無感

花の時綿帳と尺数裏うな

横山甚美

朽て逐人追かぐるやと也此書

森准志云

花見車いり多ひるも此半此子

東一語

そくあつて岑毛たのりやと也

桑外

写繪のふを善し子いふ色子

内海三子

花と粉三月く写ると書繪

林守甫

花と踏く惜むや本姓酒少能

行ふう人春宵一盃志見海

塵三言

うさく酒やうけはるると也尺酒

三語志云

うう人老甚小志け 花見海

行下書お

出さゆ久心いへんや也尺酒

白方保之

事成よくしととよむ甘也也見

南え願

花小何るぬ歌や下戸の海うと

西村三良

花中あぬ情いそらう人あけ外

本紅由光

獨乃酒法のて面白き也凡そ

此下常相

柳橋是より久花乃加んるや

井川貞也

若乃亦小あぬ也亦や柳橋

香山言集

鴻巣堂ハ碓少小む久之也凡そ

林東坦言

尺五えや子炭と也と城茶湯

此後之也

鳥毛也く流るる吾丹麻草也

風虎

鞠あつて昔ハくくくく

此の言

也小鞠あはるややと於人

三橋光弘

花ハ八重ももららるる形

大言

埋るや花也即成名取川

那山子久

花小遠志もくくくく

りや

梅
赤品一文也袖小

西山西翁

是ハ一乃之も服小も人曰く梅

行世言集

花の白いと清らるる也凡そ梅

信長久也

根又也あらぬ也昔や昔也梅梅

深田也言

有く申や也もあつたハい世

梅

鞆舟之辰

いけまやみまうしういせし

浪辺中き

塩海や雪死くした虫の白

コルアガラ

楊重妃の凝脂や花乃高

月庚

やまきや福のそのくもはる

あふ外

暮るまで今日の重を八主楊

新名出歌

花吐芽や胡巧お家はくは

風の手やあけるから家家楊

春郭公 林亭

母音のまきや桃のそくは

夏部 哥結文

郭公 井持友郭

守阿ふたわらうらうらいつ時

竹下さお

杜鶴ふももろつせ白はくし

叡山みま中井宗隆

時多たおれやいんく山法師

そり加查云

天いんたといりり辨そ子規

新川次東

初音こそ身んきみから郭公

短夜 南元順

夏のうたの賦と中宮ふ上白

牡丹 銀波伝真

孫うらまえるこそいとも世の王

吉村元次

一茶五世

富貴天小雨よまはける牡丹

芍薬 佐賀玄貞

芍薬を又字の上へ入并身

一儿 森准松

咲花やあつた一儿をうり布

石竹 森まきこ

花あはれん砂浜小入や石の竹

金銀虫 高畑市隠

石をも又たのりくはる金銀虫

石菖蒲 池山三郎

目乃酒と明小するや石菖蒲

早松草 磯江徳風

五月満花の香よりや早松草

竹下孝太

花物も多し来るる早松

麦秋 池田宗徳

来る秋や雲と八柱と春白田

新女末 日野好元

新菜古菜かきこ画り壺の内

畑清之

あうそく名とげ(うら)の秋

藤前 竹下孝太

藤より此白藤を果のまら砂子

轉 池山三郎

雲起て雨をねるのあめち

开子 竹下孝太

竹子やおひきれたこゆる雲はあ

梅雨 池田好元

から雲成りうつ雨平や梅雨

田橋 竹下孝太

田う(い)を花や舟も入る名小道江

お重

菖蒲

秋葉是也

菖蒲之目出及物也如草

水露林元

五尺之菖蒲之屏此角

競馬

小合立部

菖蒲之目出及物也如草

蚊

真方保之

白袋之毒也ハカク海ノ蚊屋の内

鰍

村塚全無

魚則不踊此海也鰍魚

鮎

松川次東

作ヤノ果枝心内也鮎魚

鮎

竹下常相

海也里也鮎魚也鮎乃鮎

別ぬるハ阿子おさる也ハ崖鮎

池宮成之

浜初小まぬる石や一度鮎

蟹

静江口

物乃左へや産るまふくと部

字治る之 澄加是海蟹

此川乃流沙流ハ蟹之蟹也

濃奈田不及

田苑の海や塩尻も阿も死

法人之知

今朝乃名蟹むすく蟹の尻

蟬

昔跡徐宗

晴天の雨子ノ蟬乃時雨也

神社

行下常相

神社山也好也神也祇園

土加洋

同

ぬま乱る人ハ所也土加洋

虫掛

同

あくねちと能業は書出持

土用干 風虎

夜の光をてて昼を土用干

蓮 棠外

蓮花を海の君子り蓮の花

竹下きお

蓮花や追風用言る府表

泉 棠外

夏ハ湯のころお城はくる泉

法水汲 今西正風

芳野かやのからもて汲む苔花

雑夏 井物有勢

流るる水走らせ川とてん

煉部 哥詩文

初燗 橋山保春

秋まぬと目業能や今朝は春

南元順

吹くらに秋のこもあや初燗

甚尾亦久

志ま世嬉し我乃一川の秋給

七夕

林守事

七夕の橋やなやむと川橋

貞吉保久

七夕小虫の燗ハ遊片造乃鞠

揚灯籠 風虎

余はよのこもや雲は夜揚灯

葉の巻後

如海村小史といひ知人揚灯籠

花火 二本松原云

口菜原といふ白文花火也

踊 竹下書也

よりの原といふ踊也花火也

子原小史阿久ぬ尺八をいひ

康云

まより子也申ふ十六音及

貞子傳之

醒哥此上小立といふ者也

相撲 竹下書也

合するだけしれたいし原也

松浦彦平 横

於由といふ者も阿久ぬ相撲

井上三三

此男といふ阿久ぬ相撲

源 菊之原

う地水也又あふる子二重源

ササ云

鞠乃庭や羅層毛者舞也

葦 竹下書也

朝白の玉市也中をいふ也

風虎 女

我や又子地柄くまは舞也

女高花 袴女也

一時と白ねるも三子也

四子也

秋の野もたふい流ゆく也

蘭 池原成之

葉菊小書たふい阿久ぬ

鳥氏 岩崎氏也

初きりや三つ白く二は鳥氏

西菖菖 竹下書丸

苗の原先出る指の西菖菖

西菖

伏て完糖一川り

貞方傳之

辛うして息出るあけあけ

生綿 風虎 たんこ

生綿吹と秋小岩あせ風乃白

原田貞伸

水針あせせしかき綿の枝

秋鱈 日路好元

熊目と鯨をま次の風味る

竹下書丸

秋風小鯨もはく子魚酒

西菖

月影やつむらるる西目子

西菖 音橋主次

書小出もはくわららるる西菖

西菖 井持友頼

秋子ぬと目白はやく小わらるる

精もあき月しく押合目白哉

塵言

はひくさくさくさくさく目白

津田知政

秋代不知痛とらるといひ

秋 葉和

むめもすくもふらふらとあうつら

鮮信英

粟白もさく種小よるうはら

西菖 西山西菖

阿葉院の文字う精ふ穂の尾

金沢由欽

まろけ此唐や出づる芦花ゆと

鹿

文勝安之

まろける西のそれ奈言や唐

木村未及

乃妻

田の唐を木のりといふぬ情起

竹下孝丸

醉泣や五葉踏ふ唐乃如

月

廣野合貞

めくち如痛や又車此又月庚

素川直隆

よる胃出まらん月此如ら身

桑本

月弓ハ様をいふはまため打

赤石のこ

雲西惟中

哥此のよとまほる女月乃身

月あつて竹下孝丸

月何りしうらあもよ何り二日如

月石小えん子に碑や哥枕

春や入日乃後此月庚

奥の師二ん

白川の月や能因う能能解

名月

杉川次東

子のるま子唐もとせし此唐月

林守甫

月乃光三五八子唐を二庚

この路まき

二子里月や三五唐申積

石井如自

月や何あこまあるん所小才の秋

唐言

月すあわ世ハ皆破ると我我

揚衣 児孫の古廣

小拍子やカキもいまは揚衣

吹上りや群介此あた又おし

木練ると行るとまゝや九日

葉 清人不知

是ハ菓子此聖子りけり行也

出雲守

放川抽も磁とすむる揚衣

行下書

菊 案外

菊 心付もいゝ人菊此おさうつ

花小心泣くも新海も菊此

秋の葉やたしもはや小ぢり

五葉指や家と教書て八月

中村毎夜

紅葉尺小山中短冊屏風式

白岩人但

雨の下此多好く此五葉紅

秋田 貞方深之

粒や出雲民乃新小摺小

新海 住友友信

二也との秋立ん門や新海

古海

紅葉

長崎中々西翁

秋の葉やたしもはや小ぢり

林亭

五葉指や家と教書て八月

中村毎夜

紅葉尺小山中短冊屏風式

白岩人但

雨の下此多好く此五葉紅

秋田 貞方深之

粒や出雲民乃新小摺小

新海 住友友信

二也との秋立ん門や新海

古海

冬部 哥詩文

時雨

志賀後家

たてぬまの時雨の亭此狂也

松川次末

かろま此狂るをらん時雨

津三計

茶葉よ小生哉時雨此に茶

粟

境女

哉

小粒や我々とゆくの粟粒

塵言

遠を以て小鳴ぬるを我哉

神来

浪人志

虎とくふ出立をへる此神来

七言五海

守新世布 神子

法合やいそそ志のふくふと

海

炭

林守節

白炭や阿まうけなる雪のま

船江口

けこまけくを小煙や炭うら

火燧

竹下孝丸

膝代入るやまへくやまの火燧

頭巾

真方洋之 其

膝くこふ油ね葉に誇しぬ中

松川次末

阿らねとや膝いふゆりもさき

纏綿

林守節 其

音をせしむるよりさき山ゆせ

暗鳥

日野好元

纏

上六下小助らぬやぬくめさる

鴨

新川次東

味は正しくはまらぬ鴨や料理

鰯

梅山保良 鰯

蒲添や鯛物より丹添鰯

蝦夷玉

中村每夜

蝦夷玉の子世をよゆは三川の

袴

袴着如故 屯

袴着やまらぬ出さぬ町より

霰

新川次東

玉のありは世も是様のあらぬ

雪

小倉新定 酒

初雪小まのて一見雪より那

之野出定

玉簾泣き小海をさくも雪ん

竹下常松 哉

火の煙より簾かけん夜乃雪

井上秋扇

香炉峯小ふらぬ雪もあは

其の云 雪の也

煙の立ふは雪もや香炉峯

林常甫

笠よるもむげのえ雪(雪の

水野林元 居

ふくめん雪雪封してや雪の

一志又幸 内

山白く雪東運雪雪雪雪雪

東田貞伸

雪ハ鵝毛とて小まきるな

雪作海 塩川如白

雪雪やうらうらと作る酒

冬木 吉原伝元

一掃色可くかんと冬乃物

重紅粉 石井如自

重の八下也凡も十指此は白

塩川如白

女小て見も重なるよれた重の五

重は言はれ

口を木の上は海の上は八下

冬之雪 墨鳥居成

うまの破ととももまの白漢

煤拂 北江家紙

等木八張之重なる煤拂

過定捨

すまねたや冬の人ま子集等

星御賞 竹下等

賣極や利物乃終星御を

流香楓林

この人かさんやをく拂

時世雑類目録

春部

元日 胡鬼子 水祝

帳上虫 若菜 包足餅

梅 鶯 朝露

二日灸 二月堂 涅槃像

春月 猫妻恋 帰扇

汲鮎 蛙 蝶

若帯 江花塩 曲水宴

鶺鴒合 雛遊 鼓草

桂花 花 桜

躑躅 蒸

時世雜韻目錄

夏部

綿梳 時鳥 夏人草
 芥子 百合 狗蹄子
 苜蓿 石莖 子松草
 桑 惟子 螢
 蚊 鴉川 鮎
 瓦 扇 虫拂
 篋 雜夏

時世雜韻目錄

秋部

初秋 七夕 楊灯籠
 魂急 苑火 朝顏
 木槿 仙舟花 女房屯
 露 岑入 指鱧
 踊 丸撲 扇鮎
 鑷 江鮭 扇
 鶺鴒 鴨 扇
 康 月 扇
 十三夜 菓 午時花
 菊 紅葉 秋田
 新海 雜煉

時世類編目錄

冬部

以切

承祝

時雨

火燧

世綿

少魚

鯨鱧

鯨魚

膏

冬菜

袴尾

雷

冰

煤掃

古乳納

餅花

節令

春部

朔小牙録狂云

元日

西村良唐

朔初

や久し世に此如く里

秋葉星出

隠るや水多吹く山外に里

三浦大虎

うら初実やあま世に道遠

田中利忠

朔初を重やを園も都成

伊原政之

大なる産乎此子相子此朔初

三田有次

春の流(流)尚風あつて銀世流

西村三徳

今春や実をほくろる者相子
輪阿門て花の心くろる者相子

志賀屋後

東春や月かしらぬいふは
昔もは家たやし有けり厚少

水野林元

形つくひさききりき
世もなき

世もなき

門もなき世もなき
大かき

新谷如碁

心非れ威徳さめこ
門の松

横山忠孝

遠きやもれ合
徳之知

田中忠政

蓬草のくさ小橋乃
小橋乃

新谷如碁

不うらむ
福井忠昌

二月や大在代々
小栞子

井物友和

大服を
徳小

新田仁春

心玉や
世のや

行下常丸

幸玉や
時扇子

雨原英種

凡おの
くん

田中忠政

手初や
其の物

新川福盛子

君乃
奇

胡鬼子

胡鬼子
や

水祝

芝野信宗

加賀子阿部氏は色二世と水鏡

西村の巻

水鏡神皇正統記の如きも

風虎

水鏡の如きも流れて中と此頁

井持友頼

神皇正統記の如きも流れて中と此頁

津田知政

是今や下知していつく水鏡

帳上虫 水田実情

上虫乃其牙の帳小津の如

若菜 竹下孝和

花陽時代の如きも流れて中と此頁

安部清

世に伝播や人の一代業の如

神皇正統記

七日の如きも流れて中と此頁

黒野子

多きも業や七法早朝七拍子

西村良彦

併乃座書や併流流布此種

与言保之

此筆此跡流布流れて中と此頁

具足餅 二重丸隠

火勢よ山ていつく水鏡

梅 魚住玄行

梅の如きも流れて中と此頁

黒西惟中

之茂好むまそんていつく水鏡

學 竹尾高安

昔や今も流れて中と此頁

佐々木清

妙理や花の量此金丸の

鳥子保く

義孝の忠をよめる金丸

朝倉 妙真の一巻

新巻のいさぎよきひの白や

水田実徳

そのあつた河ふとまの白毛

二日灸 刺田甫安

うけつてあふ金丸の二日灸

二月堂行 林元

筑後之終小年王や二日

浪瀬縁 度路人貞

美金のたまに給小吉や信人

春日 竹下孝丸

ふ金丸乃つる月や若の月

猫書無 不破一貞

書あつたの吉色けつる乃

帰原 橋本富也

うき忠小治らせる戦も了

汲船 忠徳

本曾川や汲人をたかみし

蛙 池山高故

る小蛙井自れ陸小かく

墨西惟申

とく蛙の平小治まの

蝶 竹口宣元

短うて舞うるらぬ

井上宣安

花小蝶河とらぬと舞乃袖

竹鼻若頼

福らぬ猫をよめる蝶小治

若希 一志

若新布より宜い事しむ世に
往き堪干魚子保之
往き小先物とて推し汝干也
高田有次

往き此物あるも亦日堪干也
生玉白甫

春ハ汝干海あり人乃山
曲水夏 池山言故

此物干詩魚と云ふ酒あり
鶴合 日路好元

多阿え世時ととるものけん哉
野田生西

多合九右へるもの乃いり
津田知政

鶴合小力哉合とへ
飯田夏虫

此子此屏風立事跡此物
鶴合 小沢前下

乃子句や胎肉小やとる鶴草
鶴合 宇野一煙

此毛名小と云ふある地
遠見 水野林元

手向所傳をたし世玉様
坂倉若丸

とて此物ある世のや世の雨
津田清平

茶屋も阿重苑の陰小ハ世
秋路了春

名の事 推し母よと世
芳路小ハ 池田成之

此物乃時ととるもの式
黒西惟申

竹の青いもろもろを小おしと書

中川実種

肉麻し乃しあつたの瓶乃を

日野好元

生をやまの木柱小井乃乃翁

日野好元

花小垣うそ此人乃しあつたや

谷口吉良

東山やまの卯あまをきり

林高甫

都多ゆ見物致しくを乃幕

美提をを桂字此師や法のを

若江可九

あまよるも言まの那多やをの

橋本三吉

実やあつた田小阿つたぬを感

福居秀雄

まの白のや一鉢つた花足瓶

栗園子

尺を破つた扱つたをの情をれ

奥方保之

乱濁小もなるに流天は花の

江友友信

ふるつてもあら苦路やをの

定流子

世間乃うき八幡そ花の風

雨成実種

此種ははしくと花乃を文を

江崎三賢

入おもを流あつたやをの塚

谷忠由

花小垣きりあつたぬを感

橋本三吉

櫻

清水後集

花道地土の櫻小志くハヤ

水野梅元

尺七舟目の裏を流る櫻川

伴谷久志

波岸櫻山並見給ハや御層

井川玄密

予の心と存するハ初櫻

風虎

夏子も世に於て之を児櫻

蹴躑

空疎草民

咲そふ今更何と先流

着

田中行次

花の流や流り川と着の櫻

空流りて西着

着流や志ハハハハ流りて如也

夏部

湘小舟舞

緋桜

白岩人江

綿如手や柳 立花の夏に

郭公

吉野子

阿たふの草とふふの郭公

若尾出久

結をこころすもや散るふ時の香

美人草

葉門慧後

夏人草の情情を花乃散

花子

井物友静

如き此実とちかりて花花子

百合

仙臺不及

花小園もいふくや去此車百

貞子

廣の車月と乃とくやゆり此

山本政廣

うらまへん風小まあるて車

御鏡草 山田二休 中

蛇の糸や釣ひまうと七海去

菅菰 昌西惟中

うらまへん鬼社も朝はあめ

井持友房 哉

菅菰湯やきおの歌五日又

石菰 芳路徐実

石菰虫眼氣ふ徳と殿いそや

子松草 本中守常塵

汁のまや秋よもいふ子松草

糸 富田有次

糸あつてふから時おひらや

谷口重仁

扇のうらまへり定ぬ競馬女

唐之介

疎清奈る為張八那うまへん

惟子 下河辺海著

たらぬもまうておまはれは

平戸笑依

思ふや小橋給とるまま世

董 轉江口 布

思ふよまをりくは管世

大原氏

堂史の射い志らけは流る路の

さ路うて水路林元 星

昔もやみと橋とを転乃ぬ

佐路相真

堂史を橋多の也橋い京の人

那山恒行

橋多の橋うらまへんや

蚊 雨夜笑依 堂

蚊も蚊屋の内をうらうらう阿らあ
蚊も蚊屋の内をうらうらう阿らあ
蚊も蚊屋の内をうらうらう阿らあ

小池又答

奥の戸や志らうは産を蚊やの

鴨川

世々世々

内

月入るもあは出候鴨も子も

雨之原舞舞

鮎よ此罷ふ沈まん鴨道

鮎

昔路余軍也

鮎料進三品とくくハ河原

血

江口粧え 藝

臨むも起郎多ぬまの尻

扇

土屋有扇

指やうとはぬや夏はあ扇

押川三畏

扇をもも海も第一曲一々あ

世々世々

堂の山や扇をももり鴨の池

手平

佐伯惟次

御書はとくぬもそや中辨

伊能政之

虫市や秋もも虫市小必虫

簞

鳥羽林元

至るの虫もあや構ふ葉も

難夏

世々世々

はるもあやの葉もあや

てん

煉部 楓 舞 舞 立

初秋 舞言 舞立

初秋也 舞言 舞立

七夕 舞言 舞立

早ふりまさん子向ふまると茶え

早ふりまさん子向ふまると茶え

あつて薄あけもやとらん早と

揚灯籠 池山言 故

口の外流乃車やあまもさうら

裸身 恒友友法

まれのま行とらあまあま

井上言 氣

ま比まの本のあつたもやあま

花火 風虎

ねええら枯るる竹あも花火

朝顔 水田言 情 女

船白乃乃乃乃て雁竹の境

木槿 井指友言

日小志あつたも何のあつ

仙翁花 中井言 成

まをや子我け舟の仙翁花

女言 女言 舞立

暹羅のあま言 一く雁女言

露 法人言 知

丸葉の交毛おあつた言

岑入 井指友言

岑入や跡あもあも言 泊

あま言 言 言 言 言 言

指鏡 白言 舞立

まを言 言 言 言 言 言

隔 結友言 鏡

女言 言 言 言 言 言

金沢中好
哥人書毛多あ海中央を

石魚正成
子久遠くあむむをくや醒る

相模 貞方保之
あれ横やを時た右の毛と

あまあやとらんをすれたあ
二重ねん

とらんをあをを産のた
吉村頼彦

其の海とくあをくあお横
井持友助

己まをあ又改く名のらん
尾越 貞方正成

尾越大流とくく小まを

風虎

久如の月毛尾書るや鞋鮎
鱒 尾書

秋もあ風書るあ
江鮎 尾書

水もああ水もあああ
重 尾書

石白の草とくかああ
鰯 尾書

花や河系油えあ石た
鴨 井持常伯

福らああああああ
厚 石井中目

四方の厚ああああ
康 尾書

田小康や秋書るあああ

後田一車

康苗成吹雪うしろ此山内

月 貞子深之

又月去孟秋の中此第一也

この時三時

結するを機也此山内月の中

小倉守也

龍法師幸井小倉守の月見

西原宗種也

月や雪法漫くと底に利

記置山内

百重の雪か山く袖置月此雪

行下常也

東山や只今類へ乃る月

中井山内

浪の北と北口を雪か山内月

石心老庵 西原

月出く一灯 夜一合乃唐

星月やある法小内く園子

各月 行下常也

月の男冠をく此今よも也

三井時次

山城小内く此雪草の月乃也

草山内

月を江川と雪草の月乃也

十三夜 若思佳也

月乃也 雪草の月乃也

菓 山口光俊

権や西原又此山城屋て也

日野好元

乃中権也 雪草の月乃也

水沢流下

遊生を袖へしと成りし寺此庭

後田家

酒の香の袖やいふまに此田の

上川連元

名物や先鶴葉子八肥後

寺田守昌

本意をうらみあふや併年梅

草物

寺田守昌

草物や志あるはすことかひ山

午時花

倉田野泉

花の匂時花をぬ午時花也

菊

平た舟

乃しりも花の葉の海に

追記

新し親信

美の香も花小枝る花の

志思信元

手と花の袖小枝る花の

紅葉

森川守茂

言後をみればやうし小枝花う

し出文書

くはらひの袖の下に

紅葉

名物や紅葉をぬふ玉の袴

紅葉

からり花の時雨をぬく紅葉物

蝶田

紅葉

増部もたのひ乃重此秋の縮

西山

氏の花やあはれし紅葉

新海

小池又

名といふ人うやまの紅葉

梅山

中の海や海やまの五十九

一志文書

廣重河とては人寐海今一

雜秋 耕家右我

温石小社子能乃寐冷

色部 廻録

口切 日語好元

口切 口切 口切 口切 口切 口切 口切 口切 口切 口切

子祝 路入但次 女

家の人志録 今小のる道

時雨 西暮

富建との法所のる一海雨

海辺の事

多物は海雨の地をたまに重

大雄 海邊村のる人

古のふんふんを程む月唐

耕家右我 忌

老くの痛えをたもるたふり

出綿 真方保之

河内社あるあの沙法やまのり

沙魚 意在志久 賣

沙魚家や足れハ細代の下すの

鰻鱺 風虎 子

鰻鱺や海人の市物法る一切

鰻鱺 貞方保之

下ハ波を只白をちやんハ分

芳野繪家

録法くや思ふたの力加松海

香 三原虎丸

お香のしるしは 三原虎丸の香

多葉 坂田可隆

人の心も葉も 坂田可隆の香

袴 伴人 香

袴の香よ 伴人の香

雪 香

雪の香も 伴人の香

雨庭 香

小葉 香

香

香 香

香

香 香

香

香 香

康

富士の香も 康の香

香

派 小沢 香

派の香も 小沢の香

煤 香

煤の香も 煤の香

香

すゝたの香も すゝたの香

古れ 香

古れの香も 古れの香

餅花 香

餅花の香も 餅花の香

香

餅花の香も 餅花の香

香

三巻子 新山親伝

一赤坂中世先々鬼の

神名如左

一山崎一平化世の鬼や

寺田守昌

一山崎の百々人の鬼や

長万保

除座不楽や毎に数々の

室子

